

# 公開シンポジウム「近代日本の偽史言説」

## その生成・機能・受容」

小澤 実

二〇一五年十一月七日と八日、立教大学池袋キャンパス五号館第一・第二会議室において、立教大学日本学研究所主催、立教大学SFR「グローバルヒストリー」のなかの近代歴史学」共催により、公開シンポジウム「近代日本の偽史言説 その生成・機能・受容」が開催された。

「チンギスハンは源義経である」、「アトランティス大陸は実在する」、「ひらがなより古い日本独自の文字が使われていた」、「イエス・キリストは日本で死んだ」、「東北に古代王朝が存在していた」といった、研究者ならずとも、まっとうな学問教育を受けたものであればおそらくは一顧だにしない言説群が、近代日本には、そして今に至るまで、わたしたちの周囲には存在する。本シンポジウムの共通テーマは、かような偽史言説である。

それでは偽史 (pseudo-history, false history) とは何だろうか。それを定義づけるためには、まず、歴史 (history) を描き出す歴史叙述 (historiography) とは何かを問わねばならない。わずかな時間でこの問いに立ち入って検討することは困難であるため、ここでは、史料批判という近代学問的な手続きを経て抽出された歴史的事実にもとづいて構築された、過去の世界を描出する一つの物語、としておきたい。重要なのは、私達が接する歴史叙述は、第三者による再現可能性をそのディシプリンの中に内包する近代的学問という、プロフェッショナルからなる学者共同体の承認を経ている、ということである。この点が歴史と偽史を分かつひとつのポイントではないかと考える次第である。

その上で偽史とは何かを問うたとするならば、それはつまり、近代学

問の承認を経た歴史に対抗する、オルタナティブとしての別の物語という位置が与えられるだろうか。そうしたオルタナティブたる偽史は、必ずしも近代学問手続に従った第三者による検証を必要としない。こうした偽史を紡ぐものは、自分が偽史を試みているとは考えてはいない。巷間で承認される偽史とされるものこそが真の歴史である、自分こそが真実を知っている、と信じがちである。もちろん偽史とわかったうえで、偽史を広めるものもいるのだが。

かような偽史言説については、これまでも、と学会を中心に、多くの紹介が試みられてきた。単行本としてまとめたものとしては、長山靖生『偽史冒険世界 カルト本の百年』（筑摩書房、一九九六年、ちくま文庫、二〇〇一年）、藤原明『日本の偽書』（文春新書、二〇〇四年）、原田実『トンデモ偽史の世界』（楽工社、二〇〇八年）などがその代表例である。偽史言説は、近代以降の日本社会が生み出したサブカルチャーの一分野として、大学の歴史学科での研究成果が提供しない日本近代史の「裏面史」として、多くの人の心を捉えてきたように思われる。同様の事例は日本だけではなく世界各地で確認することができ、たとえばケネス・フィーター『幻想の古代史』（上下、楽工社、二〇〇九年）やロナルド・フリッツェ『捏造される歴史』（原書房、二〇一二年）では、とりわけ西洋における偽史の事例とその背景を的確に解説している。

しかし、近年、サブカルチャーとして、いわばおかしみの対象でもあった偽史言説が、突如実態をもってメディアを席巻した。江戸しぐさと呼ばれる、史料上の根拠がないにもかかわらず江戸時代にあったとされる

道徳作法が、あたかも歴史的事実であるかのごとく実際の教育現場で教えられるという事件を巡る一連の騒動である。詳細は原田実氏の『江戸しぐさの正体 教育をむしばむ偽りの伝統』（星海社、二〇一四年）と『江戸しぐさの終焉』（星海社、二〇一六年）に譲るが、良識ある人が冗談と笑い飛ばす偽史も、ある種の条件が揃った場合、あたかも本来存在した実態を持つ歴史であるかのように振る舞い始め、わたしたちの社会に大きな影響を及ぼしかねないことを、この騒動は証明している。そうであったとすれば、偽史言説とはなんであるかという問いは、サブカルチャーの対象としての矩を飛び越え、突然アクチュアリティを帯びた社会問題として立ち現れる。

このような偽史のもつアクチュアリティを念頭に置きつつ、本シンポジウムは、近代の日本を中心に生み出された偽史言説を、学問的手続きに従って考察することを目的とした。小澤による「偽史言説へのアプローチ」を皮切りとして、第一部「神代史」という伏流」では、近代日本の偽史言説に基盤を与えた、国学思想における偽史的要素を扱った。報告内容は三ツ松誠氏による「神代文字と平田国学」ならびに永岡崇氏による「自己増殖する偽史——竹内文献の旅と帝国日本——」である。第二部「歴史」の創造」では、地域社会や戦争といった抗いがたい状況が要請する歴史の書き換えが創造する偽史言説を、馬部隆弘「偽文書『椿井文書』が受容される理由」、石川巧「戦時下のプロパガンダ——小谷部全一郎『成吉思汗は義経なり』を読む——」、長谷川亮一「『日本古代史』を語るということ——『皇国史観』と『偽史』のはざま——」が読み解いた。第三部「海外偽史との接触」では、庄子大介「『失われた大陸』言説の系譜——日本にとってのアトランティスとムー大陸——」、津城寛文「日猶同祖論——旧約預言から『ダ・ヴィンチ・コード』まで——」、高尾千津子「ユダヤ陰謀説——日本における『シオン議定書』の伝播と受容——」という事例報告を行い、海外が淵源の偽史言説が、近代の日本に

移植されることでどのような変容を遂げたのかを検証した。

二日間にわたるシンポジウムは、ウェブに掲載された情報がツイッターなどで喧伝され、当日は立ち見が出るほどの盛況であった。参加者には、いわゆる大学関係者のみならず、偽史に関心のある一般の方も多く見られた。そのことによって、偽史言説をめぐる問題系が、いかに多方面の関心を引きつけるのか、そしてそうであるがゆえに近代日本の重要な一部を映す鏡として学術的検討に価するのかを実証した次第である。

（おざわみのる 本学文学部准教授）